

日本の女性ミステリ作家と図書館・続

——小池真理子・雨宮町子のケースについて
図書館はどうみられてきたか・4——

佐藤毅彦

Images of the Library, 4

——How Have Japanese Woman Mystery Writers Depicted Libraries?
The Case of KOIKE Mariko and AMEMIYA Machiko

SATO Takehiko

Abstract: These papers consider how libraries and librarians are depicted in the works of Japanese woman mystery writers, continuing the previous year's studies.

This time KOIKE Mariko and AMEMIYA Machiko (both born in the 1950s) are made the target of analysis.

There are many points which draw connections between the students and the library in Koike's work. People who do not understand how to use the services of the library come there to do research. In the works of both writers, the librarian who comes out to answer users' questions fails to appreciate their specialities.

If the image of the library does not change, people will not be able to take advantage of new services. The image strategy of the library needs to be given more thought.

要旨: 前年に続き、日本の女性ミステリ作家の作品に描かれている図書館・図書館員について検討した。今回は、いずれも1950年代生れの、小池真理子、雨宮町子を取りあげた。

小池真理子の作品には、学生と図書館との関わりを描いたものが多い。図書館で何かを調べるケースでは、必ずしも日常的には図書館と縁のないような人物が、利用している。また、図書館員については、両者の作品とも、利用者からの質問に対応する場合、必ずしもその専門的なやりとりが強調されているとは言えない。

図書館について、現在の日本で定着しているイメージが存在している状態のまま、新しいサービスの方向性をめざしても、利用者に十分に活用されないこともありうる。図書館のイメージを戦略的見地から考える必要がある。

1. はじめに

大正期から昭和の敗戦後の時期まで、有力な女性作家として数多くの著作を発表し、また、各種の団体を通じて、運動の実践者としても活躍した宮本百合子(1899～1951年・明治31～昭和26年)に「上野の図

書館には、明治の前半期に樋口一葉がよく通った。一葉日記に「ここは屢々出て来る」と述べている文章がある¹⁾。これは『文芸』1947年3月号に掲載された「図書館」というタイトルのもので、戦後、数年ぶりに訪れた際の「上野の図書館」の変貌ぶりについて、以前の婦人閲覧室が廃されて一般閲覧室となっていることを「この役人くさい図書館が、やっと世間なみに、男

女共通の閲覧室をもつ決心をしたということには一種のユーモアがある」 「男子、女子の区別は、従来の日本の半官的な場所では愚劣なほど神経質であった」と記述している。また、その「婦人閲覧室」を利用する仲間がきっかけとなってつくられた「婦人たちのグループ」についてもふれている²。

この文章は、敗戦直後、日本の図書館サービスがどのような状況のもとにあったか、を示している一例であるといえよう。ただ、ここでとりあげられているのはのちの「国立国会図書館支部上野図書館」（現在は「国際子ども図書館」）でのことであり、その利用はあくまでも館内での閲覧に限られていた。先の文章の続きの部分には「三階の書籍かりだしのところ」という言葉が出てくるが、これは書庫から出されてきた書籍を、館内で読むために受け取る場所のことである。また、1948 年の国立国会図書館法、1950 年の図書館法公布以前のことであると思われるが、戦後ではあっても、利用は有料であり「閲覧料を十銭だせ、と書いてある」との事実が紹介されている。

その宮本百合子が没した翌々年に生れた、高村薫（1953 年～・昭和 28 年～）の小説で、今年（2002 年）単行本として刊行された『晴子情歌』（原文は一部旧字・旧かな）には、昭和 30 年代のシーンがあり、その中に登場人物のひとりが、図書館を利用していることを思わせる場面がある³。

「『女性は工場の昼休みに県立図書館でエンゲルスの「空想より科学へ」を借りて読んだんだ。六〇年の八月（引用・注：1960 年 8 月）のお盆前だった』（下巻 p.287）『あの人はずっと昼休みは図書館だと言う』『暑い日で、真昼の誰も歩いていない国道にバスが着いて、母が降りてきた』『そのとき母は図書館で借りてきたという本を三、四冊抱えていて、一冊は大江健三郎だった。もう一冊が文庫本の「空想から科学へ」（原文のママ）で、他に何があったかはもう忘れしました。私は中学三年でしたが、ぼつぼつマルクス主義を齧ってみるくらいの年齢でした』（下巻 pp.289-290）とあり、主要な登場人物である、この語り手の母親が、職場の昼休みに県立図書館へ行って、本を借りてくる姿が描かれている。この女性は、小説の冒頭部分で「昭和九年三月」に「数えの十五歳」（上巻 pp.10-11）だったとあり、先のシーンにある 1960（昭和 35）年時点の年齢は、40 歳前後であると考えられる。

このシーンは、青森市が舞台であり、時代は 1960（昭和 35）年のこととして設定されている。当時は、

地方（青森）にあって、中年の女性で、図書館を利用する人はそれほど多くはなかった。そうした中で、この人物が他の人たちとは違って、県立図書館へ通い、よく本を読んでいたことを印象付けるエピソードとして、このシーンは挿入されていると考えられる。

当時の都道府県・市町村の図書館は、先の宮本百合子の文章にあった「上野の図書館」のように、館内利用に限定していたわけではない。しかし、『青森県立図書館史』（1979）によると、1960（昭和 35）年度の利用状況は「閲覧室の利用が 310 日、男 36,596 人（27,475 冊）、女 20,158 人（12,885 冊）」 「貸出 309 回、男 9,792 人（9,789 冊）、女 4,147 人（4,150 冊）」 「一日平均、閲覧 783 人（131 冊）、貸出 46 人（46 冊）」（p.349）となっており、館外への貸出も実施されはいたものの、図書館内での閲覧が主な利用形態であったことがわかる⁴。

また、1951（昭和 26）年に制定された「図書館利用規則」では、通常、館外へ貸出を認めるのは、一冊のみであり、先の利用統計の冊数をみても、図書館の外に借りていくことのできる冊数は、1 人 1 冊に限定されていたことが明らかである⁵。したがって『晴子情歌』の登場人物の女性が「図書館で借りてきたという本を三、四冊抱えて」バスから降りてきた、という状況は、実際には、ありえないものである。

現代の作家である高村薫のイメージには、図書館は、館外へ本を「貸出」するところ、というものがあり、それがいつの時代に定着したかは、はっきりとはわからないものの、少なくとも 1960（昭和 35）年のシーンで「利用者が図書館から複数の図書を借り出ししている場面を登場させても特に不自然ではない」と考えていたことを示している。しかし実態は必ずしもそうではなく、貸出冊数の制限が緩和されていくのは、1970 年代の後半になってからである⁶。

これらの例にもみられるように、女性作家の文章に登場する図書館や図書館員は、それがノンフィクションであれ、小説であれ、作者の出生年代によっても、作品の発表時代によっても、また、作品の時代設定によっても、描かれ方が異なっている。「図書館はどうみられてきたか」というテーマで、前回は女性ミステリ作家として、加納朋子、若竹七海（いずれも 1960 年代生れ）をとりあげて、その作品での図書館の描かれ方について検討した。今回は同じ女性作家でも、やや年代が上に属する小池真理子、雨宮町子（先の高村薫と同じく、いずれも 1950 年代生れ）の作品をとり

あげた。日本の社会に敗戦直後の混乱が、まだ残っていた1950年代から60年代に成長期を体験し、その後、作家として複数の作品の中に図書館をさせることになった両者が、どのような描き方をしているかを検討することで、図書館の描かれ方の多様性の一端をあきらかにしようと試みた。ふたりの作品にはミステリの範疇を超えると考えられるものもあるが、ここではそれらも検討の対象に含める。

(なお、出典を明記する際、『』は単行書名、「」は単行書に収録されている個々の作品名を表すものとする)

2. 小池真理子と図書館

小池真理子は、1952年、東京生れ。成蹊大学文学部英米文学科卒業後、出版社勤務を経て、1978年、エッセイ『知的悪女のすすめ』を発表¹⁾。その後、小説の分野でも作品を発表し、1989年「妻の女友達」で第42回日本推理作家協会賞(短編および連作短編集部門)受賞²⁾、1996年『恋』で第114回直木賞受賞³⁾、さらに1998年には『欲望』で第5回島清恋愛文学賞を受賞している⁴⁾。

小池真理子の作品には、登場人物が図書館したり、図書館が小説の場面に使われているものが多数存在するが、そうした作品をいくつかのケースに分けて検討する。

★登場人物が図書館で何かを調べようとするもの

○『墓地を見おろす家』⁵⁾

加納美紗緒は、三十代の主婦。新築の都心に近いマンションに引っ越すが、周辺は、墓地や廃墟同然の地域だった。このマンションでホラー映画さながらの現象が続くので、図書館に調べに行く。

「区立図書館は、JRの高井野駅からさらに北に歩いて十五分ほどのところにあった。国道に面した区役所の裏手にあるなんの変哲もない三階建ての建物で、車がひっきりなしに走る国道の騒音を考えるととても読書にふける環境ではなかった」「美紗緒が区の歴史や行政についての資料が見たいと言うと、受付にいた白髪の男は黙って指を三本突き出しながら、聞き取れない声で『三階』と言った。図書館で喋るのは罪悪であると思っているらしかった」「三階の行政資料室には人がまばらにいただけだった。隅の大きな本棚に『N区関係資料』と書かれた黄ばんだカードが貼ってある」(pp.118-119)と、図書館の周辺環境や館内の状

況、その館での地域に関する資料の様子が描写されている。

地域資料は、さほどの量があるわけではないが、その現状は「棚の隅にひと束にまとめられた古いスクラップブックが積んである。誰の手垢もつけられないままに、埃をかぶってしまった無用の長物といった感じのする茶糸のスクラップ帳で、開くと綴じ部分の金属がぎしぎしと鳴った」「中は昭和三十年代後半から四十年にかけての広報紙や、臨時発行された薄いパンフレットなどがいっぱい詰まっていた」(p.121)とある。

他の利用者については「部屋には誰も人がいなかった。さっきまでうろうろしていた学生ふうの男のふたり連れも、とうにどこかに行ってしまった」(p.123)とあり、利用者が少なかったことをうかがわせる。

図書館の職員は、先に「受付にいた白髪の男」「図書館で喋るのは罪悪であると思っているらしかった」とあったが、そのあとの場面では「受付のところにさっきいた初老の男がじっと前を向いて座っていた。あまり動かないので石像のように見えた」(p.124)とあり、活発な図書館利用に対応しているようには感じられない。利用者の質問に図書館員が回答している場面は「彼女はふと思いたって、男に近づき、『妙なことを伺いますが……』『は?』『失礼ですが、このあたりのことにお詳しくいらっしゃいますか』男は撫然とした顔をしたが、『そりゃあね』とくぐもった声で答えた。『ここに勤務して三十二年になりますからね』」とあり、彼女がこの地域のことについてききたいという『『なんですか』と男は興味を持っているにも拘わらず、関心のなさそうな顔をして再び、前を向いた」「男はぺらぺらと喋り始めた。声が高くなり、ホールの壁にかすかにこだました」(pp.124-126)という対応をしている。ずっと同じ所に長く勤めているので昔のことについてはよく知っている様子うかがえるが「男はひと目で入れ歯とわかる不自然に白い前歯を見せて笑った」「お手数をおかけしました、と言って頭を下げると、男も軽く会釈を帰した。美紗緒は外に出た」(pp.126-127)という描写は、必ずしも図書館員について好意的なイメージをもたらすものではないだろう。

○『闇のカルテット』⁶⁾

記憶喪失の「ルンペン」(この作品では、定住する家をもたずに、主として路上など生活している人々をあらわす言葉として使用されている)が図書館を利用する様子やその時の心境、また、そのような人物に対

する他の利用者たちの反応、さらに図書館職員がどう対応しているかが描かれている。なお、作品中の「公園図書館」は有栖川公園にある東京都立中央図書館(東京都港区)をモデルとしている。

・図書館の状況をあらわす描写

「五月の連休が明けたばかりの都立公園図書館は、比較的、空いていた。いつもは学生で混み合っている三階の人文科学室も、人影まばらで、占領されているテーブルは三つ四つしかない」(p.3)「図書館内には学生たちが行き交っていた。頭にベイズリー模様のバンダナを巻いた男とミニスカートの女が、カード閲覧コーナーでくすくす笑いながら、互いの腰のあたりをつねっている」(p.57)「席は半分以上、塞がっている様子だった。誰もが目の前に掲げた本やノートに目を落としている」(p.60)「公園図書館は、蝉しぐれに包まれており、夏休みを利用してやって来ている学生たちでごった返していた」(pp.267-268)「一階の奥の新聞資料室に入る。資料室に学生の姿は少なく、大半が暇つぶしに昔の新聞を眺めに来たような初老の男ばかりだった」(p.268)公園には「もう学校が始まったせいか、子供たちの姿はなかった。学生ふうの男女が連れ立って、図書館のほうから降りて来るだけだ」(p.293)など、学生の利用が多い図書館の状況が描写されているが、それ以外の利用者の姿は、暇つぶしの老人を除けば、ほとんど描かれていない。

・「ルンペン」が図書館を利用していることについての心理描写

「自分は臭っているのかもしれない」「二ヶ月以上は風呂とは無縁の生活をしている」(p.3)「公立の図書館にルンペンが入ってはならない、という法律はないものの、やはり、奇異な印象を与えるらしい」「女子大生たちが好奇心たっぷりの目をして、彼が手にしている本のタイトルを読みとろうとした。彼は本能的に本の表紙を手の平で隠した」「ミッシェル・フーコーの『知の考古学』などという難しい本をルンペンが読んでいた、とわかれば、彼女たちはむこう一週間、キャンパスでの話題に事欠かないだろう。だが、そうさせるのはどうしてもいやだった」「彼はそそくさと開架式の棚に本を戻し、受付台にいた顔見知りの中年の女に軽く頭を下げると、部屋を出た」(p.4)「俺は目立ってるんだな、と思った。臭うせいで。汚いせいで。ルンペンが図書館で本を読んでいるせいで。思っていた以上に、自分は好奇の目にさらされているのかもしれない」(pp.7-8)と、この利用者が、自分が他の利用者にどう思われているかを気にしていることを

示す描写がある。彼は、会話の中で『「税金も払っていない人間が図書館に来るのはおかしいかもしれないけれど……」』(p.10)という発言もしている。

彼は事故により、過去の記憶を失っているが、面倒なので病院や警察には行っていない。「図書館に通うようになったのは、ひとつには記憶喪失に関する文献を読みたいと思ったからだ。何冊かの医学書を読み、彼は自分がいわゆる“全生活史健忘”と呼ばれる心の病にかかっていることを知った」(p.84)と、利用目的のひとつが「自分の生活に関連した事実を調べるため」であることが明らかになる。

やがて記憶をとりもどした後、自分が関係していると思われる事件について『「去年の新聞を調べれば、警察がどんな動きをしていたかがわかる」』(p.248)と、新聞を調べるため図書館へ行くことを思い立つ。「図書館へ行くのは半ば恐ろしかった。一年前の新聞の縮刷版を開いた途端、社会面にでかでかと自分の顔写真が載っているのではないか。そしてその場で、図書館の職員にそれを見られ、警察に通報されてしまうのではないか」(pp.251-252)と感じている。

記憶をとりもどした後の図書館利用については「汗まみれではあっても、髪を短く切りそろえ、まともな恰好をしている彼のことをあの読書好きのルンペンと結びつけて考える人間はいないようだった」「一階の奥の新聞資料室に入る。資料室に学生の姿は少なく、大半が暇つぶしに昔の新聞を眺めに来たような初老の男ばかりだった」「まっすぐ縮刷版コーナーに行き、一九八八年七月分と八月分のA新聞縮刷版を手にとった。席に座って、ページをめくる勇氣はなかった。彼は立ったまま、狭い棚と棚の間に身を寄せた」(pp.267-268)という描写になっている。

・図書館のボランティアについて

登場人物のひとりに、図書館で朗読奉仕のボランティアをしている女性が登場する。彼女は「一人っ子」で、親に庇護されて育ったが「子供のころ、軽い神経症を病んで」「登校拒否」の状態になったことがある。両親に先立たれたが、生活に不安はない状態で「朗読奉仕をするために、丸一年、講習も受けた。自分のしていることが、誰かの役にたつことを思うのは嬉しい」(pp.16-17)「心を閉ざし、せめてもの社会参加としてボランティアの朗読をやりつつ、なんとか自分をごまかしてきた自分が滑稽だった」(pp.23-24)というキャラクターに設定されている。

・図書館の職員について

職員について、「ルンペン」の利用者は「そそくさ

と開架式の棚に本を戻し、受付台にいた顔見知りの中年の女に軽く頭を下げると、部屋を出た。女は見て見ぬふりをしたが、敵意のある感じはしなかった。「それこそ雨の日も風の日も、図書館が休館の日以外、毎日、本を読みにやって来る得体の知れない人間のことを、少なくとも職員たちは追い出そうとは思っていないようだった」(pp.4-5)というように感じている。

また、体調を口実にボランティアをキャンセルした女性は「病名を聞きながらいる様子が見てとれたが、さすがに遠慮したらしかった」(p.56)「身体の具合が悪いので、朗読奉仕は当分、できなくなった、と職員に申し出た時、ちらりと職員が目が彼女の首手に向けられた」(p.57)のように考えている。図書館の職員は、あからさまにプライバシーを詮索するのではなく、一般的な関心の範囲内での対応をしている描写になっている。

利用者の質問に対応する様子については「人文科学室に入り、こわごわ受付デスクを見る。デスクでは、二人の学生風の男がぶ厚い本を差し出しながら、中年の女子職員に何やら質問をしているところだった」(p.61)のようなケースが描かれているが、とりたてて専門的な知識が必要とされているわけではない。

その他に、登場人物が何かを調べるために図書館を利用する作品の例としては、次のものがある。

○『仮面のマドンナ』⁷⁾

大学を3年で中退した後は、小説を読んだり、画をかいたりしている男性が、事故にあった女性について「『君のことは全部、調べたよ。今日の午後、図書館に行った。ママが眠っている間にね。古い新聞とあのころの雑誌をほとんど全部、見てきたよ』彼は振り向いて、面白そうに続けた」(p.193)と発言している。

○『ナルキッソスの鏡』⁸⁾

20代で、自分の精神状態に不安を感じている、作家志望の男性が、自分の精神状況について「知りたいと思って、図書館に行き、何冊ものぶ厚い精神医学専門書を読み耽ったこともある。だが、どこにも彼が納得するようなことは書かれていなかった」(p.100)とある。

★高校生や大学生が図書館を利用するもの

○「獣の家」(『記憶の隠れ家』収録)⁹⁾

高校三年生の男子が「午後から図書館に行って望月と合流し、一緒に勉強した後、気分転換に二人で町をぶらつくつもりでいた」(p.57)彼は、父親の仕事の

関係で転勤が多く、何度も学校をかわっていた。兵庫県のあるN町、大阪梅田から電車で三十分ほどの、新興住宅地に居住している。「午前中は自室で勉強しているふりをしていたが、いてもたってもいられなくなって、昼食もそこそこに家を出た。母には図書館に行く、と嘘をついた」(p.65)というシーンがある。

○「夜顔」(『水無月の墓』収録)¹⁰⁾

主要な登場人物である女子大生が、大学の夏季休暇に入っても、帰省するのがいやで「親に手紙を書き、勉強が忙しくて大学の図書館で調べものをする必要がなくなったから、と嘘をついて東京に残る。(p.98)彼女は「大学進学と同時に、実家のある新潟から東京郊外のその町に越し、丸二年が過ぎていた」通っていた大学は女子大で、私鉄を使えば二駅という近さに」ある。「生れつき虚弱」(p.80)で、友人もできない。その後も、結婚してもうまくいかず、ついに自殺してしまう。

○「幼女たち」(『美神 (ミューズ)』収録)¹¹⁾

「一九七〇年、夏目幸男が十八歳になったばかりの八月」(p.14)「多摩川を見下ろせるマンション」に住んで「都立高校」(p.17)に通っていた。「その夏、幸男は或る意味で規則正しい毎日を送っていた。午前中は、予備校で夏期講習を受け、午後は冷房の効いた公立図書館で勉強する。図書館を出るのは、日が翳って涼くなってから。その後は、町の書店をうろついたり、喫茶店で友達と世間話に興じたり。夕食の支度をする母の手間を考えて、遅くとも七時までには家に帰った」(p.19)夏のある日、路上で、知り合いの女性と出会い、「『プール? それともデートかしら』『図書館です』幸男はぶっきらぼうに答えた」『暑いのに大変ね。お母さんから聞いたわ。受験勉強中なんですか?』」(p.21)という会話をしている。

★図書館が出会いの場になっているもの

○「泣かない女」(『妻の女友達 小池真理子短編セレクション4 ミステリー編』収録)¹²⁾

小笠原敬一は、二十四歳、大学院でイギリス文学を専攻している。容貌は魅力に乏しいが、元華族の遠縁で、成績は抜群である。「真紀は彼と同じ大学に通う学生である。知り合ったのは学内の図書館。偶然、同じ、『エリザベス朝悲劇論』という書物を探していて、言葉を交わしたのがきっかけだった」(p.69)とある。

○『無伴奏』¹³⁾

この作品のヒロインは「高校時代の最後の年を私は

伯母と共に暮らした」(p.15)「当時通っていた高校で秘密裡に結成されていた制服廃止委員会の委員長に選ばれた。宮城県は公立私立を問わず、大半の高校が男女別学である」(p.19)という人物である。

伯母にボーイフレンドのことについてきかれて「私は即座に『東北大の図書館で知り合ったの』と答えた。『消しゴムを落とした時、隣にいた彼が拾ってくれたのよ。次に彼がシャープペンシルを落として、私が拾ってあげたの』そう、図書館でね、と伯母は安心したように言った。図書館で知り合った男は皆、インテリで品がよくて無害である、と信じているような感じだった」(p.133)と述べている。彼は、東北大学の三年生で、実家は仙台、高校から東京にいった老舗の和菓子屋の息子である。実際に、ふたりが、はじめて言葉をかわしたのは「地下のバロック喫茶」「小さな穴ぐら」(p.47)のようなスペースである。

この他に、登場人物の大学生が『『帰るの?』『いや。大学の図書館に行く。調べものがあるね』』(p.170)と発言している場面や「祐之助は、大学の図書館におり、その後でエマと待ち合わせをする事になっている」(p.173)というシーンがある。

★その他、図書館がストーリーの中に登場するもの

○「団地」(『恐怖配達人』収録)¹⁴

団地の便利さを説明する発言で「小学校や中学校は近くにあるし。デパートみたいにでかいマーケットが二つもあるし。公園も病院も銀行も郵便局も図書館もある。駅は近いし、大勢の人間が住んでるから寂しくないし」(p.191)と、図書館も施設のひとつにあげられている。また、団地に住む主婦の発言に『『今、夫は会社に行ってるし、子供は図書館に行ってるし』』(p.208)というものがある。

○「首」(『薔薇船』収録)¹⁵

「英語のテキストを机の上に拡げ、図書室で借りて来たばかりの『十五少年漂流記』を手に取った時でした」(pp.136-137)という場面は、この人物が、中学一年になった年の冬であり、期末試験を控えて、学校から帰ると部屋で勉強し、本をたくさん読んでいた。

○「封印の家」(『薔薇の木の下』収録)¹⁶

「父亡き後、大半の蔵書は図書館や大学などに寄付してしまった」(p.91)という発言がある。この人物の父は医者で、六十二歳で病死するが、生前は、医学雑誌に記事を書いたり、僻地医療に貢献したということで「新聞のインタビューを受け」(p.92)たことがある。

○「花ざかりの家」(『記憶の隠れ家』収録)¹⁷

「そんな倉越と手塚が、親しく口をきくようになったのは、ほかでもない、中学三年になった年に、二人して図書委員に選出されたからである」(p.135)とある。

★図書館で働く人物が描かれているもの

○『欲望』¹⁸

青田類子は、私立の学校図書館に勤めている。

・中学生時代のエピソード

中学時代の友人からの手紙に「学校図書館の司書をなさっているとのこと。いかにもあなたらしい、と思いました。中学時代、あなたはいつもどこか怖いような印象がありましたが、それはどこにでもいるような単なるガリ勉少女の、鎧で固めたような怖さではなかった。あなたにはあのころから、あなた自身の世界があった」(p.15)と書かれている。また、この人物が、中学校の同級生について「当時、私は読書量を彼と競い合っていた。自分の知らない本を彼が読んでみると腹立たしくなり、すぐに図書館に行って探して来ては読みふけた。探偵小説であろうが、少年向き冒険小説であろうが、何でもよかった。内容は選ばなかった」(p.33)と回想しているシーンがあった。職につく以前から、読書や本に親しみを感じている人物であったことをうかがわせるエピソードである。

・図書館へ就職するまでの経過

その後「一九七〇年、私は都内にある私立大学文学部に入学した。日本赤軍派による、よど号ハイジャック事件が起きた年である」「大学では演劇部に入部することになるのだが、もとより演劇に興味があったわけではない」(p.47)という学生時代を送り、職業を選択する時期を迎える。

「公立や私立の一般の図書館ではなく、学校の図書館司書を希望したのは、規模が小さければ、個人の自由が効くだろうと都合のいい想像を働かせたからである。資格を取り、私は中学から短大までそろっている、都内にある私立 K 女子学園の学校司書の採用試験を受けた。新規採用が一人だけのところに百人近い応募があり、まるで期待していなかったのだが、どういふわけか、私だけが採用された」(pp.86-87)という経過で、現在の職場に勤めることになった。

・図書館の仕事についての考え方

ある日、書店で「ずいぶん前から欲しいと思っていた、いつのまにか見かけなくなってしまった厚手のイギリスの翻訳小説が、復刻版として新刊コーナーの片

隅に並んでいた」「手にとったとたん、どうしても欲しくなった。上下巻合わせて七千六百円。学校図書館用の希望図書リストに入れておけば、何の問題もなく受け入れられるであろうことは、わかっていた。だが、図書館の本はあくまでも図書館の本であって私有物ではない」(p.8)と考えているシーンがある。

また「本が好きだからといって必ずしも司書は務まらない、ということは知っていた。司書というのは一種のサービス業であり、カウンター越しにあらゆる種類の人間と対話できなければいけない。個人的な趣味に溺れながら本の価値を決めることも許されない。人間嫌いで閉鎖的、頑固で内向的な人には殊に向かない、と断言する人もいて、そうまで言われると自分には無理かもしれない、と思ったが、それでも他に進む道は考えられなかった」(pp.86-87)とも感じている。

・現在の職場と業務の内容

「私は、中学校から短大までそろった私立の女子高に勤めている。といっても、教師ではない。学校には別棟になっている大きな図書館が建っていて、私はそこで働く学校司書である」(p.9)そこでの毎日は「日頃、華やいだものとは無縁の生活を送っている」「司書になってから、早くも二十年たっている。毎日毎日、図書館で本に囲まれた生活をしていながら、何も休みの日に書店めぐりをしなくてもよさそうなものだ、と誰もが言う」「順番に店内を一巡するのに、一時間ですんだためしはない。それは、私のささやかな、欠かすことのできない楽しみのひとつであった」(p.9)と描写されている。

学校図書館と仕事の実情については「お世辞にもレベルの低い学校であったが、歴史があることと、卒業生の中に元華族の令嬢も少なくなかったせいか、生徒はかなり裕福な家庭の娘ばかりだった。寄付金の多さが功を奏したか、施設はどこもかしこも充実していた。中でもキャンパスに別棟として建てられた大きなドーム型の美しい図書館は、蔵書の数进行を誇りとする見事なもので、国内のみならず、外国からも関係者が視察に訪れることで有名だった」「朝は八時四十五分までに出勤し、その日の新聞をそろえてから開館する。休み時間と昼休み、そして放課後以外は生徒や短大生の出入りは少なく、教師や教授らが時折、やって来ては調べものをしていく程度で、手が空いた時は存分に読みたい本をあさることもできた」「四時五十分には閉館し、五時ちょうどにはもう帰り支度を整えて帰途についている。寄り道をせずにアパートに帰り、自分で食事を作り、銭湯に行くと十二時には床につい

た。しばらくの間、私の生活はおおむね、そんなものだった」(p.87)「夏休みと春休み、冬休みは学生同様、たっぷりとれたので、その度に両親の住む札幌の家に帰った」「学校司書は私を含めて四人おり、全員が女だった」(p.88)とある。

なお、ここでは「学校司書」という言葉が使われているが、この人物と中学時代の同級生との会話で「『私ね、今、図書館に勤めてるのよ』『司書になったの？へえ。すごいな。どこの図書館？』『学校司書なの。学校の図書館で働く専任の司書教諭よ』」(p.133)と発言している場面がある(いうまでもなく、現実には、「司書教諭」と「学校司書」は別の存在である)¹⁹⁾。

・職場の人間関係

彼女は、高等部の教師(妻帯者)と親密になり、週に一度、彼がマンションを訪れるようになる。そのきっかけは「世界史の文献を探しに図書館を頻りに訪れていた彼に頼まれ、たまたま私が手助けをしたことから、親しく口をきくようになったのが始まりだった」(pp.88-89)という。職場では「勤め先の学校の教師や職員たちと個人的な親しい関係は持たなかった」「私と他者とは常にどこかで決められたように一線を引き合い、引かれた線のこちらとあちらに分かれて、終始、にこにこ愛想よく微笑み合っただけだった」「私はただ、本を読んだり、映画を観たり、地味な暮らしをすることに満足している、どこか変わり者の女に過ぎないと思われていた」(pp.248-249)という状況にあった。

・昔の友人に職場を案内する場面

「三時半になって、ふと未返却の本をチェックする仕事が残っていたことを思い出した。私はボードを片手に開架式の棚を見て回り、返却されていない何冊かの本と貸出カードを照合する作業を始めた」(pp.237-238)「何冊くらい蔵書があるの？」という質問に「八万くらいかな。学校図書館の中では全国で一番規模が大きいよ」(p.240)と回答している。

友人が「三島由紀夫の作品を何冊か、棚から抜き取ると、ばらばらと中をめくり、そのつど裏表紙の内側についている貸出カードを引き出して眺めた」「貸出の回数が多いのと少ないのと差があるね」とあるように、貸出の記録にはブックカードを使用していると思われる。

この会話の続きの部分で、三島の作品を「熱心にここで読んでいく生徒」がいたことが紹介される。彼女は「目立たない」「あんまり笑わない真面目な感じ」

「目立たない地味な生徒」などと形容されている。同じ学園の短大に進学するが、卒業を前にして心中を図り、亡くなってしまふ。

他に、図書館の事務を担当する人物が登場する作品に次のものがある。

○「寺田家の花嫁」(『怪しい隣人』収録)³⁰

ゆとりのある生活をしている女性が、両親の死後、財産があったので、働かなくても生活できたが「学生時代の恩師に頼んで、短大の図書館に就職口を見つけてもらい、簡単な事務の仕事を始め」(p.131)る。過疎地域の嫁探しパーティーに参加して、結婚するが、流産し、夫やその家族にも不信感をもつ。

3. 雨宮町子と図書館

雨宮町子は、1954年生まれ。『骸の誘惑』で1997年第2回新潮ミステリー倶楽部賞を受賞し、デビューした³¹。現在までに数点のミステリ、ホラー小説を発表している。発表された作品は数点だが、その中で、図書館を利用したり、図書館に勤める人物が描かれているものが複数ある。

○『眠る馬』

深町洋子は「開業医の一人娘」で、「彼女自身、外科医」「専門は小児外科」である。「医師としての仕事のあいまに、ボランティア活動」(p.57)をしていたが、体調をくずして、現在は開業していない。夫は競走馬に関する仲介業務をしている。

たまっていく新聞の扱いについて「記事を読み返したいときは図書館へ行くということで、夫婦は妥協」(p.174)したが、ある日、彼女は購読している『朝日新聞』の中に切り抜きの跡を発見し、切り抜かれた記事を調べるため「区立図書館」へ行く。そこで「図書館員から新聞の束を受け取り、閲覧用机の一つに向かう」「切り抜いた記事はすぐに見つかった」「カウンターへ戻り、先月の読売と毎日とを閲覧したいと言っていた」「一週間分ずつホチキスで綴じられた二紙の山の中から、切り抜きのあった朝日と同じ日付の新聞を見つけ、広げる。記事を探す」「読売新聞には男の顔写真も載っている。写真はずいぶん小さい。鮮明とはいえない」「顔写真の載っている読売の記事をコピーした」とある。帰って「スナップ写真と図書館でコピーした記事の写真を比べてみる。まちがいがなく同一人物だという確信が持てない」(pp.175-176)ので、後

日また図書館へ出向くと、「図書館には必要な雑誌のバックナンバーが保管されていた。そのうちの一冊に、新聞ではついに見ることのできなかった男の鮮明な顔写真が載っていた」(p.244)とあるように、新聞・雑誌のバックナンバーを、図書館で調べ、コピーするという行動をとっている。

同じ作品登場する、有田(男性)は騎手で、年齢は30代。ある競走馬について調べるために「『軽種馬協会のデータ通信サービスにアクセスして』」(pp.94-95)と、パソコン通信を利用している知人に、依頼している場面がある。また、十数年前の外国での競走馬誘拐事件について「『当時の新聞の縮刷版にあたってみようと思う』」(p.102)と発言している。さらに、この件に関して、共同通信の写真部に属する知人に記事をFAXで送信してもらう(pp.133-135)。

彼が、北海道の千歳空港近郊にいる際、あることを調べる必要が生じたとき、タクシーの運転手に「『図書館。市立図書館へ。どこでもいいです。いちばん近いところ』」と告げる。「運転手が、もう閉まっているのではないかと言った。五時五十分だった。市立図書館は五時に閉館するのだろうか。有田にはわからなかった。生まれてからこれまで、図書館を利用したことがない」「——図書館は閉まっていなかった。閉館時刻は七時だという」のように、まったく利用経験のない人物がなにかを調べようとした際に、市立図書館を思いつく、というストーリーになっている。

その図書館での職員の対応は「カウンターには六十年配の男性が座っていた。どのようにしたら自分が望むような本を見つけられるのか尋ねると、検索しましょう、二件ですね、と言って、にこりともしないで、端末を叩いた。無愛想だが不親切ではない」「年配の図書館員は、一件目の検索を終えて、書名リストのプリントアウトを差し出しながら、『とりあえずは、リストの五番目までの本で間に合うと思います。現在すべて書架にあります。閲覧可能です。二件目も検索するのは簡単です。ですが、そういうことをお調べになるなら、最初に百科事典などにあたってみるのが早いでしょう。こちらへどうぞ』図書館員はカウンターの外へ出ると、先に立って書架のあいだを歩いていく。美術書の書架の前で立ち止まると、『ああ、これで用が足りるかも知れません』一冊の事典を有田に手渡して、『百科事典はあそこの棚です。この事典に載っていないければ、百科事典も利用してください』有田は礼を言って、立ったまま事典を開いた。その項目はすぐに見つかった。ていねいな説明が続く。読み終えて、

事典を元の場所へ戻した。五冊の本は離れた二つの書架にあった。閉館まで一時間しかない。それぞれの目次にざっと目を通す。必要な情報をいちばん手取り早く与えてくれそうな一冊だけを棚から抜いて、閲覧机に向かった」(pp.355-356)といったもので、押し付けがましくなく、利用者に的確な対応をしている様子がうかがえる。

○『殺される理由』³⁾

図書館でアルバイトをしている男性に関わる事件を扱った連作短編集である。「先月、亮介は三十になった」(p.10)とあり、「大学の獣医学部の卒業を目前に控えたある日、亮介は自転車に当て逃げされて骨盤骨折の重傷を負った」「快復には予想外の月日を要した。内定していた中央競馬会への就職も白紙となった」(pp.14-15)という経歴である。興信所でアルバイトをしたことがあり、そのときの人脈をたよりに、図書館利用者まつわる事件を解決しようとして、さまざまな行動を起していく。

図書館での待遇については「区立図書館での職を失うわけにはいかない。どんなに薄給でも」「正式な司書の資格をもっているわけではない。単なる臨時雇いである。ほとんどボランティアのようなものだ。ボランティアとの差は『時給をいただいて、いいんですか』と恐縮しないだけ、である」「火曜から木曜、それに日曜の週四日はこの区立図書館で働いている」「図書館の休館日である月曜が亮介の休日だった」「時計の針は五時十分まを指している。図書館は七時までだが、火曜日は早番で、返却された本を書架に戻せば仕事は終了する」(pp.11-12)となっており必ずしも優遇されていないことがわかる。また、アルバイトであっても、カウンター業務をこなしており、「取り寄せをご希望の図書がはいりました」(p.10)と利用者への電話連絡をすることもある。

利用者の一人、夏川鮎子は「二十一の女子大生」で、亮介は、彼女の「住所も電話番号もわかっている」「P区立図書館で利用者登録をするとき、申込書に記入する事項なのだ。カウンターにあるコンピュータの端末を操作すれば、図書館員なら誰でも見ることができる情報である」「亮介は、鮎子の自宅に電話をしたことさえ何度かある」「××図書館です。取り寄せをご希望の本がはいりました。一週間以内に取りにきてください」(p.10)とあるように、図書館職員なら、利用者のプライバシーに関する情報に接触しうることが示されている。彼は「ときどき考える——これ以外のせりふを言ったら、どうなる？ 図書館、クビ

だろうか。クビに決まっている」(pp.10-11)と考えて自重している。

彼女が返却した本から「ひらりと、何かがページのあいだから抜け落ちた。床から拾いあげる」「二つ折りになった罫線入りの紙。ノートの切れ端らしい。広げてみる」(p.12)とあり、この紙片がきっかけになって、事件が展開する。亮介は、夏川鮎子のおかれた困難な状況を推測し、なんとか彼女を助けようと、行動していく。

図書館職員が、利用者の個人情報に接触でき、利用者のためを思っていることではあっても「図書館資料の管理」という目的以外に、個人情報を使用してしまうストーリーは、利用者の図書館員に対する信頼を傷つける可能性のあるものといわざるをえない。

他には、次の作品のように図書館は登場しないが、新聞を調べる際にコンピュータを利用しているものがある。

○『骸の誘惑』⁴⁾

予備校の古文担当講師(女性)が「パソコンを立ち上げた。オンラインで新聞情報にアクセスする」(p.320)場面がある。

4. 日本の女性ミステリ作家と図書館・続

小池真理子の著書には、「著者自作年譜」が収録されている⁵⁾。それによれば、小学校時代は東京都大田区在住で、1959年、大田区立久原小学校入学。ピアノを習い始める。1962年、『りぼん』『なかよし』などに掲載されていた少女漫画の影響を受け、自分でストーリーを編み出して漫画を描いては、友達に読ませたりし始める。学校の図書館で本を借りて読む楽しみを知る。1965年、父の転勤で、兵庫県西宮市に転居、私立甲子園学院中等部に入学。その後、転居により、西宮市の公立中学校を経て、兵庫県立鳴尾高校に入学するも、父の転勤のため、仙台市に転居し、宮城県立第三女子高校に編入している。このころ、反戦運動や集会へ参加し、喫茶店に入りびたる日々を過ごす。1971年、高校卒業後、受験に失敗し、仙台で浪人生活を送る。1972年、成蹊大学文学部英米文学科に入学。卒業後は、出版社勤務を経て、エッセイ集の発表、小説の刊行という経歴をたどっている。

小池真理子は、作品点数も多く、その傾向も多様なものがあるが、図書館の描かれ方には、いくつかの特徴がある。まず、学生と図書館との関わりを描いたものが多いことがあげられる。受験勉強をする(『獣の

家」「幼女たち」), 図書館で調べものをすると親に嘘の手紙を書く(『夜顔』), 大学院生の男女が図書館で知り合う(『泣かない女』), 女子高校生が男子大学生と知り合った場所を図書館であるといつわる, 大学生が図書館に行く(ともに『無伴奏』), などである。また『闇のカルテット』には, 図書館の状況を説明している場面が数カ所あるが, そこに利用者として登場しているのはほとんど学生である。さらに「夜顔」『無伴奏』では, 学生の登場人物が, 事実と異なる状況説明を, 保護者にする際の口実に, 図書館の無難なイメージが使われる, というストーリーになっている。

図書館で調べものをとするケースでは, 記憶喪失状態の「ルンペン」男性が, 昔の新聞・雑誌を調べる(『闇のカルテット』), 大学を中退し定職をもたずにいる人物が昔の事件について新聞・雑誌を調べる(『仮面のマドンナ』), 主婦が地域資料を調べる(『墓地を見おろす家』), 作家志望で精神的に不安定な状態にある男性が精神医学の専門資料を調べる(『ナルキッソスの鏡』)など, 必ずしも調べることと日常的には縁のないような立場の人物が, 何かを調べる必要があるシチュエーションにおかれると, 図書館を利用している点が特徴的である。また, 図書館に来ている「ルンペン」や図書館の朗読ボランティアをしている人たちが, 他の利用者や図書館職員からどうみられているかを気にかけている心理についても, 描かれている(『闇のカルテット』)。ただ, 図書館でボランティアをしている女性は神経症を病んだことがあり(『闇のカルテット』), 学校図書館によくきていた生徒が卒業後心中をはかる(『欲望』)など, 図書館に関係することが, 必ずしもいいイメージにつながらないケースがみられる。

小池作品に登場する図書館員は, 「白髪の男」「初老の男」(『墓地を見おろす家』)「図書館員の男」「中年の女子職員」(『闇のカルテット』)「学校の図書館司書」(『欲望』)などである。「ルンペン」の利用者からみても「敵意のある感じはしな」いし, 「得体の知れない人間のことを, 少なくとも職員たちは追いつくとは思っていない」(『闇のカルテット』)ようである。しかし, 図書館員が利用者からの質問に対応する場合でも, 必ずしも専門的な知識が強調されているとはいえない。その図書館の存在する地域の資料についての質問に関しても, 利用者は図書館員がほんとうに質問に有効な回答をしてくれるのか確信がもてず, ためらいがちに質問しているし, 職員も回答でも, ただ長く同じ図書館に勤務していることのみが強調されて

いる(『墓地を見おろす家』)。また, 「公園図書館」の職員は, 利用者の質問に対して, とおりいっぺんの対応をしているだけである(『闇のカルテット』)。『欲望』では, 女性の学校図書館司書が, 主要な登場人物のひとりであり, 私立学校(女子中・高校)の実態をある程度反映した描かれ方になっている。「一種のサービス業である」ことや, 図書館の本の選択について「図書館の本はあくまでも図書館の本であって私有物ではない」という一定の見識を持っていること, などは紹介されているが, 学生や教員に対するサービス内容については具体的に描写されてはいない。むしろ利用者が少なく「四時五十分には閉館し, 五時ちょうどにはもう帰り支度を整えて帰途についている」とヒマそうで早く帰れる職場といったイメージになっている。また, この人物は, 他の教職員とのあいだに一線を引いて「変わり者」とみられるようなキャラクターとして描かれている。

雨宮町子の作品では, かつて小児科医をしていて現在は主婦の女性が, 区立図書館で古い新聞・雑誌を調べる(『眠る馬』), 競馬の騎手が, 事典などの参考図書で北海道の市立図書館で調べる(『眠る馬』)場面があるが, 発表時期が1990年代後半ということもあり, 何かを調べる際に, コンピュータを使って情報源にアクセスするシーンもみられる。また, 雨宮作品に登場する図書館員は, 「六十年配の男性」(『眠る馬』)で, 利用者の質問に対して「にこりともしないで, 端末を叩いた。無愛想だが不親切ではない」と, 過度に愛想よくすることはなく, 押し付けがましいわけでもなく, 必要な情報を提供するという点では的確な対応をしている。また, 「先月」「三十になった」「正式の職員でなくアルバイト」の男性職員(『殺される理由』)は, 司書資格をもっていないが, カウンター業務を担当し, 利用者の個人情報に接することも可能な環境にある。直接的な被害をもたらすことはないが, 利用者のおかれた状況をひとり合点し, 独断的な行動をとっている。これらの職員は, 男性ではあるが, 年配者やアルバイトで, 他の企業や行政, 研究機関などの意志決定過程において, 中枢的な存在となっている年齢の正規職員男性ではない。

これまで「図書館はどうみられてきたか」ということで, 複数の作品に図書館を登場させている作家の作品を分析してきたが, 個人が「本を借りる」という現代の図書館での主要な利用形態が多く描かれているわけでは必ずしもない。今回とりあげたふたりの作品で

も、むしろ何かを調べるために、図書館へ行くというケースの方が多い。

調べるための場として、多様な登場人物が、さまざまなシチュエーションで図書館を利用する場面が描かれてはいる。しかし、現実には、すでに、図書館に出かけなくとも、多様な情報源にアクセスできるようになってきており、今後は「何かを調べるためにわざわざ図書館へ行く」というモチーフは、ストーリーの中で使われなくなっていく可能性もある。

5. おわりに

アメリカでの体験をもとに、図書館について精力的な発言を続けている菅谷明子は「日本で『図書館』といえば、せいぜい本を借りたり、新聞・雑誌を読むか、あるいは受験生の自習室といったイメージしかない」と述べている。そうした状況に対して、アメリカの「ニューヨーク公共図書館科学産業ビジネス図書館（通称 SIBL）」での取材をふまえて、日本でも「ビジネス図書館というインフラは、個人が持つ様々なアイデアや能力を最大限に引き出し、経済を活性化させる上で、一考に価するものといえるのではないだろうか」と主張する¹⁾。

実生活や仕事に役立つ情報を提供する図書館サービスが、日本で、これまでも実施されていないわけではない²⁾。また、ニューヨーク公共図書館が、ビジネス情報の提供に、そのサービスを集中しているわけでもない³⁾。であるならば、今、なぜ、ことさらこうした方向が強調されるのか。

「ビジネス」を意識したサービスが、他よりも優先して提供された場合、日本で、成功する可能性が高いと考えられるのかどうか、また、それは利用するがわにとって望ましいものなのかどうか、などの点について、多方面から検証する必要がある。実際にこれまでも、そうしたサービスがまったく実施されてこなかったわけではないにもかかわらず、利用者の図書館イメージが、菅谷の指摘しているように「本を借りたり、新聞・雑誌を読むか、あるいは受験生の自習室」といったものであるなら、それを変えていくことが、日本の図書館で、ビジネス支援サービスが定着するための前提条件となる。

1963年に出版された『中小都市における公共図書館の運営』（中小レポート）は、当時の状況について「たまたま資料に対する要求が起っても、図書館に対するこれまでの悪いイメージはその足をとめてしまう

か、図書館がそれにこたえる機関と考えられず別の手段で解決されてしまうことが多い。はっきり言って、現在の公共図書館の大部分は、市民から忘れられた存在であることを認めなければならないだろう」（p.67）と述べている⁴⁾。その時点からすでに40年が経過しようとしている。図書館数や利用者数は増加し、利用される資料の数も増加した。しかし、図書館のイメージは、日本の社会において40年前と比べて、変わっていない部分も存在していると考えられる。

図書館を取り巻く状況を解明するひとつの糸口として「図書館はどうみられてきたか」について検討してきたが、図書館のイメージ、図書館が社会においてどのような存在とみられてきたかは、過去の歴史的な部分についてだけでなく、今後の図書館経営の方向性に影響すると思われる。図書館について、現在の日本で定着しているイメージが存在している状態のまま、現状の枠組みを変えて、ビジネス支援などのサービスを優先させていっても、それが、利用者十分に活用されないこともありうる。

図書館のサービス内容は多様化し、利用者からさまざまな要求がよせられる一方で、図書館が使える資源は、資料費についても、専門職員についても、ますます予算の確保が困難になってきている。そうした状況中では、図書館のイメージが空洞化してしまうおそれがあるのではないが⁵⁾。

2002年1月から放映されたテレビドラマ『恋ノチカラ』では、ヒロインの友人「倉持春奈（23歳）」が、「司書をめざすOL」「昼は仕事をしながら、夜は司書になるための講座に通っている」というキャラクターに設定されていた。OLが「目指す」職種として「司書」が肯定的にとらえられてはいる。しかし、それ以上具体的なストーリー展開はなく、実際の仕事の内容や、その専門性などをアピールしているシーンが放映されたわけではない⁶⁾。

これまでは「図書館はどうみられてきたか」というテーマについて、ミステリやテレビドラマでの図書館の描かれ方を中心に検討してきたが、今後は、それ以外の領域も視野に入れて、図書館がどのように「みられてきたか」を、歴史的経過とともに将来的な動向との関連にもふれつつ、検討していきたいと考えている。

注

1. はじめに

- 1) 『宮本百合子全集』として、河出書房(全15巻, 1951~1953), 新日本出版社(全25巻, 1979~1981, 別巻1・2, 補巻1・2, 1981~1983, 補遺, 1986), から刊行されたシリーズがある。さらに、現在、新日本出版社から新たな全集が刊行中(全33巻, 2000~)である。
- 2) 宮本百合子「図書館」『文芸』1947. 3
ここでは『宮本百合子全集第十七巻』1981, 新日本出版社, pp.701-709, を参照した。
- 3) 高村 薫『晴子情歌 上』2002, 新潮社
高村 薫『晴子情歌 下』2002, 新潮社
- 4) 青森県立図書館史編集委員会編集『青森県立図書館史』1979, 青森県立図書館, p.349(なお, この部分は『東奥年鑑』三十六年版を典拠とすることが記載されている)
- 5) 『青森県立図書館史』pp.760-762, には, 「青森県立図書館利用規則(昭和二十六年十一月二十七日)」第三章 館外利用 第十条 本県内に居住し館長において必要と認められた者には, 資料を館外に携出利用させることができる」「第十三条 同時に携出できる冊数は一冊とする。但し, 特別の事由により館長の許可を得る者は, この限りではない」とある。
- 6) 『青森県立図書館史』pp.942-957, には, 1970年代後半の時点でも, 青森県内の多くの図書館では, 貸出冊数制限が, 2冊ないし3冊(弘前市立弘前図書館のみ4冊)であることが示されている。

2. 小池真理子と図書館

- 1) 小池真理子『知的悪女のすすめ』1978, 山手書房
- 2) 小池真理子「妻の女友達」『あなたに捧げる犯罪』1989, 双葉社
- 3) 小池真理子『恋』1995, 早川書房
- 4) 小池真理子『欲望』1997, 新潮社
なお「島清恋愛文学賞」については, 石川県美川町のHPの中で, 概要・選考委員プロフィール・歴代受賞者, が紹介されている。
<http://www.town.mikawa.ishikawa.jp/>
- 5) 小池真理子『墓地を見おろす家』1993, 改訂初版・角川ホラー文庫(初出『墓地を見おろす家』1988, 角川文庫書き下ろし長編)
- 6) 小池真理子『闇のカルテット』1989, 双葉社
- 7) 小池真理子『仮面のマドンナ』1987, 角川書店(文庫)
- 8) 小池真理子『ナルキッソスの鏡』1993, 集英社(初出「小説すばる」1992. 2~9)
- 9) 小池真理子「獣の家」『記憶の隠れ家』1995, 講談社(文庫)(初出「小説現代」1993. 7)
- 10) 小池真理子「夜顔」『水無月の墓』1996, 新潮社(初出「小説NON」1994. 10)
- 11) 小池真理子「幼女たち」『美神(ミューズ)』2000, 講談社(文庫)(初出「小説現代」1995. 5)『美神(ミューズ)』1997, 講談社, にも収録。
- 12) 小池真理子「泣かない女」『妻の女友達 小池真理子

短編セレクション4 ミステリー編』1997, 河出書房新社(初出「小説推理」1988. 8)『あなたに捧げる犯罪』1989, 双葉社, 『あなたに捧げる犯罪』1992, 双葉社(文庫), 『妻の女友達』1995, 集英社(文庫), にも収録。

- 13) 小池真理子『無伴奏』1994, 集英社(文庫)(『無伴奏』1990, 集英社)

この作品(文庫)の裏カバーには, 「学園紛争, デモ, フォーク反戦集会。1960年代, 杜の都・仙台。荘厳なバロック音楽の流れる喫茶店で出会い, 恋に落ちた野間響子・17歳と堂本渉・21歳。多感で不良っぽい女子高生と男からも女からも愛されるような不思議な雰囲気の大學生の危険で美しい恋」と記載されている。

また, 佐々木譲による文庫版解説では「すでに何ページかこの作品を読んだ読者は, この作品が六十年代後半という時代についての, ノスタルジーに満ちた小説であることに気がついたろう」(p.287)と述べられている。小池真理子は, 高校時代からの十代後半の一時期を仙台で過ごしており, そのことが, この作品にも反映されていると考えられる。

- 14) 小池真理子「団地」『恐怖配達人』1993, 双葉社(文庫)『恐怖配達人』1990, 双葉社, にも収録。
- 15) 小池真理子「首」『薔薇船』1999, 早川書房(初出「ミステリマガジン」1992. 8)
- 16) 小池真理子「封印の家」『薔薇の木の下』2000, 徳間書店(初出「小説現代」1993. 11)『記憶の隠れ家』1995, 講談社(文庫)にも収録。
- 17) 小池真理子「花ざかりの家」『記憶の隠れ家』1995, 講談社(文庫)(初出「小説現代」1994. 6)
- 18) 小池真理子『欲望』(前掲)
- 19) 「司書教諭」は「学校図書館法」の条文に規定されている正規の資格であり, 「置かなければならない」とされているが, これまでは, 少数の例外を除いて, 学校現場で発令されることはなかった。1997年に法改正が行われ, 猶予期間が設定されていたが, 2003年4月からは, 12学級以上の小・中・高等学校には, 必ず「司書教諭」が発令されることになる。一方「学校司書」は法律に定められた正規の資格ではなく, 現在学校図書館での事務作業を担当している職員を総称して使うことが多い。「学校司書」として勤務するために必要な資格は, 特に定められてはいない。
- 20) 小池真理子「寺田家の花嫁」『怪しい隣人』1995, 集英社(初出「小説すばる」1994. 5)

3. 雨宮町子と図書館

- 1) 雨宮町子『骸の誘惑』2000, 新潮社(文庫)(『骸の誘惑』1998, 新潮社)
- 2) 雨宮町子『眠る馬』1999, 幻冬社
- 3) 雨宮町子『殺される理由』2000, 徳間書店(初出『問題小説』1998. 10)
- 4) 雨宮町子『骸の誘惑』(前掲)

4. 日本の女性ミステリ作家と図書館・続

- 1) 小池真理子『小池真理子 短編セレクション6 サイコ・サスペンス編Ⅱ』1997, 河出書房新社, pp.204-217
『無伴奏』『恋』『欲望』については「作者自身の多感な青春時代をモデルにした一連の長編作品」といった評価もある(竹内裕一による「解説」。出典は, 小池真理子『男と女 小説と映画にみる官能風景』中央公論社(文庫)1998, pp.211-217)。

5. おわりに

- 1) この部分の続きは「しかし, アメリカの公共図書館は, やる気とアイデアと好奇心あふれる市民を豊潤なコレクションに浸らせ, 新しい価値を生み出すために惜しみない援助を与えるなど, いわば孵化器としての側面を持っている。なかでも, 個人の経済的自立を促し, 地域経済を活性化させるビジネス支援は, 図書館の規模を問わず広く行われているサービス分野の1つで, 景気が低迷する時ほど重要な役割を果たす」となっている。

出典は, 独立行政法人経済産業研究所(RIETI)のHP(<http://www.rieti.go.jp/>)に発表された「RIETI コラム0021: 新規ビジネスを芽吹かせる米公共図書館」による。

責任表示は「経済産業研究所客員研究員 菅谷明子」日付は2001. 11. 16。

なお, この著者の図書館に関連する代表的な著作として,

菅谷明子「進化するニューヨーク公共図書館」『中央公論』1999. 8, pp.270-281

菅谷明子『メディア・リテラシー 世界の現場から』2000, 岩波書店(新書)がある。

- 2) たとえば, 塩見昇は「これからの図書館と図書館研究」『図書館界』vol. 54, no. 3, 2002. 9, pp.148-154, において「市民一人ひとりの個別の要求にいていねいに応えようとすれば, いま新しい情報サービスとして話題になるビジネス支援の情報提供, 「起業」情報の提供といったこともこれまでの図書館サービスの範疇で十分とらえきれることである。問題は, そのようなことまで図書館が役立つという認識が人々の中に醸成されているかどうか, そのように図書館の活用をアピールできたか, そういう図書館の機能を感じせしめるような実態を図書館活動の日常が備えているかどうかである」

(p.151)と述べている。

また, 進化する図書館の会・編『進化する図書館へ』2001, ひつじ書房, に収録されている, 松本功『『市民の図書館』から『市民活動の図書館』へ』(pp.44-54)では, 「神戸の図書館人によって, 80年代初頭にビジネス支援図書館への先進的な提案がなされてい」(p.48)たことが紹介されている。これは, 当時, 筆者らも関係した, 下記の論文を示唆していると思われる。

伊藤昭治, 川崎良孝, 竹島昭雄, 佐藤毅彦「日本の公共図書館でビジネスライブラリーは成り立つか」『図書館界』vol. 33, no. 3, 1981. 9, pp.146-154 (論文発表の時点で, 伊藤・竹島両氏は, 神戸市立図書館の職員であった)

- 3) ニューヨーク公共図書館のHP(<http://www.nypl.org/>)を参照すると, この図書館がさまざまなサービスを提供していることが実感できる。

- 4) 中小公共図書館運営基準委員会報告『中小都市における公共図書館の運営』1963, 日本図書館協会

たとえば, 2002年度, 司書課程受講生の「『2005年の図書館像』(2000年12月, 文部省)に描かれた図書館の近未来像を実現するために必要な方策は何か」という課題に関するレポートには「まずクリアすべき問題はなんといっても予算であり, そして図書館の存在感のなさである。図書館を大きく変える原動力として描かれる『市民の図書館への強い要望』は残念ながら現実には考えにくい。情報への要求は今日増大するばかりであるのに, 図書館は多くの市民からは遠い存在である」と書かれたものがあつた。

- 5) 清水義範「やっとかめ探偵団と唐人お吉」『やっとかめ探偵団と鬼の栖』2002, 実業之日本社, pp.136-145 (初出『週刊小説』2000. 11. 10~2001. 2. 9)では「四十六歳」「子供は二人」の主婦で, パートタイマーとして働いている人物が, 旅行先の情報について息子にインターネットで調べてもらったと発言している場面がある。従来は個人では入手しにくかった情報が, インターネットを使うことで, ごく簡単に手に入れることが可能になってきている状況を背景にしていると考えられる。

- 6) 2002年1月から放映されたドラマ『恋ノチカラ』のHPは次のとおり。

http://www.fujitv.co.jp/jp/power/cast_main.html